

自分を守るための英語教育

鳩のように優しく、蛇のように賢い国際人養成のために

English Language Education for Self-protection

目的論、教材、教授法

三浦 孝

Miura Takashi

気持ちよい接客のみやげ物店、優しく面倒見の良いホストファミリー、親切に道案内をしてくれる通行人、英語教材はこういう善良で親切な人々に満ちている。しかし、本当にいつもこのような教材でよいのだろうか。こういう教材ばかり 6 年も 10 年も勉強しているうちに、外国がそういうパラダイスのような所だと本気で思い込んでしまう恐れはないか？日本人海外旅行者が見知らぬ人の誘いに乗って車に同乗し、犯罪の餌食になる事件を耳にするたびに、「この人たちは、日本でも当然実行すべき安全確認を、なぜ海外では行わなかったのか」と不思議に思わざるをえない。

青少年の外国に対するあこがれを壊すつもりはない。ただ、どこの国にも悪人は存在し、ミスは発生し、人間関係の摩擦も存在する以上、それに対処できる言語交渉能力を生徒に育てるのも言語教師の責任ではないか。例えば買い物で釣り銭が間違っていたらどうするか、ホストファミリーの中に好意的でない人がいたらどうするか、道を尋ねたら車に乗れと言われたらどうするか、そういう身近な場面で、我々はもっと「自分を守る」方略を養成すべきではないか。

本稿では、過去の海外犯罪被害やトラブルの事例を紹介し、日本人英語話者が被害に陥りやすいコミュニケーションパターンを解明し、自分を守るための英語教育の方法の一端を提案して、こうした研究の端緒としたい。

1 海外犯罪被害やトラブルの事例

<事例 1> コン・アーティストの餌食

例えば空港などの待合室で、誰かがあなたの目の前で転倒し大量の金品を床にばらまく。「拾うのを手伝って」という頼みに応じてそれを拾っている間に、あなたのかばんやスーツケースがなくなってしまう。もちろん転倒した者も所持品を奪った者も同じコン・アーティスト(con artist)のチームなのだが、証拠が無いのでどうしようもない。

コン・アーティストとは、巧みな手口で人をだまして金品を搾取する犯罪者のことである。相手の善意や信頼を利用して詐欺を働くので、無条件に人を信用し、人に親切にする文化の中で育った日本人は被害に会いやすいと言われる。例えばアメリカ国内の防犯心得を掲載しているホームページ <http://www.safetycops.com> には、Con (コン・アーティストのこと)の手口が詳細に説明されている。また、NHK テレビの番組でも「ねらわれる日本人」というテーマで取り上げられたことがある。

<事例 2> 釣り銭詐欺

海外旅行で買い物をするとき、レジに行く前にあらかじめ合計金額を計算して行く人は少ない。ま

た、レジで支払いを済ませた直後に、レシートに正規の金額が打ち込まれているかどうかを点検する人も少ない。それほど我々は店員を信用しきっている。しかし現実には海外での釣り銭詐欺や両替詐欺の話はよく耳にする。英語の教材には決まってショッピングの場面が登場するが、残念ながらそこには上記のような実情が反映されていない。これに対しては、「教材のダイアログは言語学習のために書かれているのだから、必ずしも現実を反映する必要は無い」という反論もあるだろう。しかし、善人ばかりが登場する現実離れした教材で教え続けられれば、結果として生徒に世界の虚像を植え付けてしまう恐れも否定できない。

<事例3> スパゲッティー・レイプ事件

10 年ほど前のことであるが、イタリアを旅行していた日本人女性 4 人が、カタコトの日本語を話す男に「家でスパゲッティーをごちそうしてあげる」と誘われてついてゆき、男のアパートに監禁されて襲われるという事件があった。もしこれが日本であつたら、彼女らは見知らぬ男をそのように簡単に信用しただろうか。また、素性もわからぬ男の牙城に自ら出向くという、まさに「カモがネギを背負う」がごとき行動を取っただろうか。海外旅行の開放感ゆえにという面もあるだろうが、「人は親切」「人は紳士」といった誤った先入観も警戒心の無さにつながったと思われる。

<事例4> これは 8 年ほど前の事件であるが、アメリカに高校留学していた日本人女子が、校外でクラスメートの男子高校生に銃で射殺され、所持金を奪われた。この男子は、日本人女子高校生がクラスで「昨日親から生活費が送金されてきた」と話しているのを耳にし、放課後に彼女をドライブに誘い出して、人気の無い所に連れて行って殺害し金品を奪った。

<事例5> これは数年前に起こった事件である。オーストラリアのダイビングスクールに留学していた日本人女性が、到着数日後に行方不明になり、1 ヶ月後に死体で発見された。犯人は現地の金髪で背の高い白人少年で、「宿まで送ってあげると言って車に乗せ、人気のないところに連れて行ってレイプしようとしたら抵抗されたために絞殺した」と供述した。

<事例6> これは、数年前にアメリカの大学に留学していた日本人の女性（仮に J さんと呼ぶことにする）から聞いた体験である。彼女は大学の寮に入り、アメリカ人の女子学生（仮に A さんと呼ぶことにする）と相部屋になった。A さんは、はじめから J さんに対してぞんざいな態度を取っていたが、J さんはそんな二人の関係を良くしようと、精一杯愛想よく振る舞っていたという。A さんの方は、そんな彼女にはかまわずラジカセを大きくかけたり、友人を大勢部屋に招いて夜遅くまで騒ぐことが多かった。それでも、J さんはいやな顔をしないで我慢していた。

ある日、J さんは学校へ行くために一旦部屋を出たが、忘れ物をしたことに気がついて部屋に戻ることにした。近づくにつれて、自分の部屋からは大きな笑い声が聞こえてきた。なんとそれは、A さんが友人を大勢招き入れて、J さんの日本語なまりのたどたどしい話し方を身振り手振りを添えて真似して笑わせているのだった。更に部屋に入ってみると、A さんの友達が J さんの区画を、ベッドまで含めて我が物顔に使用しているではないか。J さんはたまりかねて、顔を真っ赤にして A さんに詰め寄り、これまでの無礼と自分勝手さに抗議した。すると A さんは真顔で、“Why didn't you tell me earlier?” と答えたという。不満があるならなぜ最初から言わなかったのか、ということである。J さんはその日をもって寮を変えたという。

さて、これらの事例に共通することは、こうしたトラブルが言葉の通じる人に起こっており、実はその人たちは言葉こそ通じるけれども安全方略が未発達なために、トラブルに無力だったということである。

2 英語教材の前提

今日流通している中高生向けの英語教材には、日本人が外国で人々と交流する場面が多く描かれているが、そうした場面は一様に次のような前提で描かれている（表 1 のア列参照）。

- ・相手の外国人は常に善良である。
- ・相手は私に対して常に好意的である。
- ・相手は常に私の意向をすすんで理解しようとしてくれる。
- ・私が好意を持って接すれば、相手も私に好意的に接してくれる。

これらは理想としては良いかもしれない。しかし問題なのはこのような前提が現実世界の実態とは一致しないことである。表 1 のエ列に示したように、当然どこの国にも日本と同じように悪人があり、自分に好意を持たない人もあり、意向や都合を勝手に押し付けてくる人もいる。にもかかわらず英語の教材はそれとは違う前提で書かれている。つまり、教材が世界の現実を反映していないのだ。

3 なぜ easy target になりやすいのか

表 1 のア、イ、ウ列を横に見て行っていただきたい。教材の前提（ア列）が日本人の対人的姿勢（イ列）と実によく類似している。その 2 つが合わさって海外トラブル場面での日本人の行動（ウ列）が出てくる。例えば先述の事例 5（送りオオカミ）の場合、「海外で出会う人は常に善良である」という前提が日本人旅行者の「相手の善意を無条件に信頼してかかる」対人姿勢につながり、相手の車に乗るという「無防備な全面委託」の行動をとらせる。被害者の中では首尾一貫しているこの行動様式は、しかし世界の实情（表 1 のエ列）とかけはなれているために悲劇を招くのである。

また、事例 6（無礼なルームメイト）の場合、「たとえ無礼な相手でも、こちらが好意を持って接すれば、相手もやがては態度を改めてくれる」という前提に立って、日本人学生は相手の気に入られようとし、ひどい仕打ちにかえって笑顔を見せていたわけである。この行動様式も本人の中では整合性を持っていたわけだが、本音を隠した彼女の言動はルームメイトには「抗議することもできない愚鈍な人」としか写っていなかったようである。もしも J さんが最初から A さんの無礼や身勝手に抗議していれば、二人はもっと良い関係が築けたかもしれない。

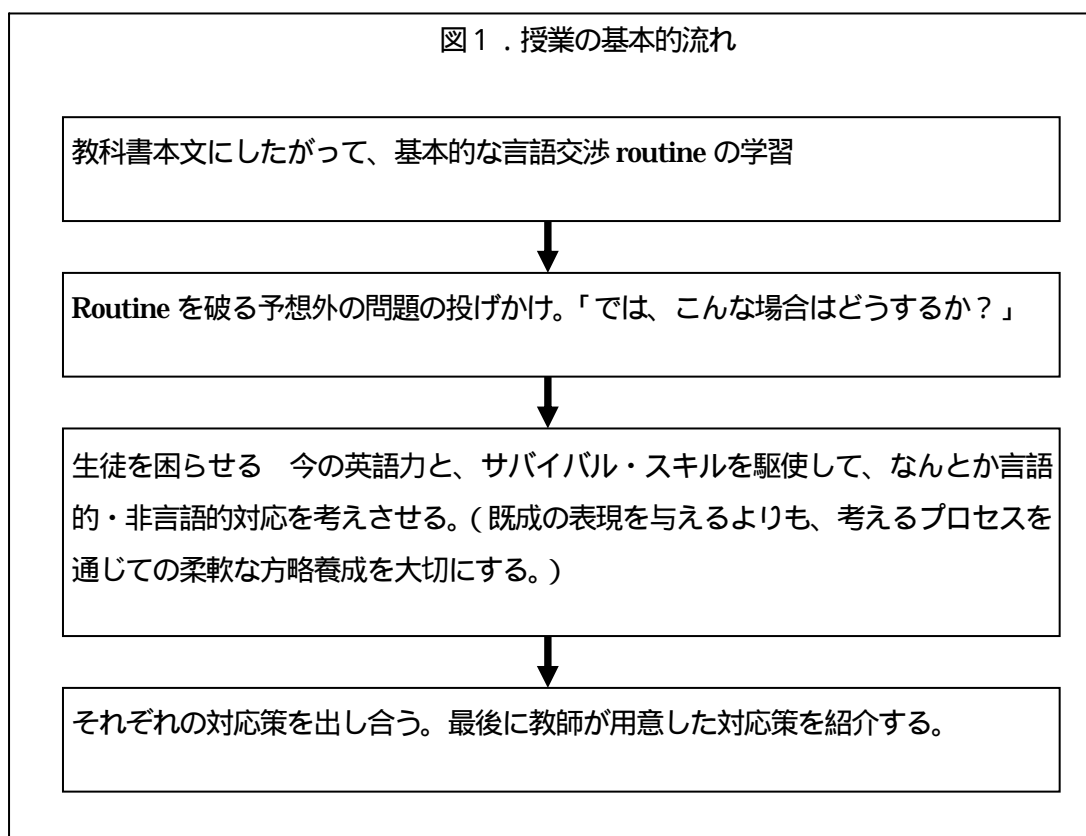
表 1 の「ウ・海外トラブル場面で日本人のとりがちな行動」と「エ・世界の实情」を対比してみると、日本人の持っている対人姿勢が世界の实情とミスマッチを起こしていることがわかる。そして表 2 に表されたように、日本人の対人姿勢が海外トラブル場面では、かえって自らを easy target に陥れる働きをしかねないことがわかる。「悪人かもしれないのに無防備に身を任せてしまう」「相手がこちらに悪意を持っているのに、それすらも善意と思い込んで従ってしまう」「相手が自分の勝手に押し付けてくる要求を、犠牲的精神で吞もうとする」「相手の理不尽な振る舞いを、はねつければ相手も一目

おくのに、ひたすらご機嫌を取る行動に出て、余計に軽視される」- ここから見えてくるのは、自分の安全を犠牲にしてまで相手との「友好的コミュニケーション」を図ろうとする、ナイーブすぎる日本人の姿である。

このことを考えるとき、日本の英語教育は今までのような海外美化の前提を修正して、教材により社会の現状を反映させ、その中で自分を守る英語コミュニケーション能力の育成を図る必要があると言える。

4 自分を守る英語の指導方法

自分を守る英語コミュニケーション能力育成のためには、教材で一通りの言語交渉の routine（決まりきったやりとり）を学習したあとで、その routine に社会の現状（表 1 のエ）を反映させた活動を行うことである。例えばショッピングを扱った教材で、最初は通常（何のトラブルもない）の客と店員のダイアログで学習するが、続く発展段階では教材をコンフリクトを含んだ場面に改作し、「こんな場合どうしたらよいか」を生徒になげかけるのだ。その流れを図示すれば、図 1 のようになる。



このような指導原理にもとづいた自己防衛的英語コミュニケーションの指導例を以下に紹介する。

<指導例 1 : ショッピングゲーム>

対象：中学 3 年生～高校生

目的： 釣り銭や請求金額の間違いが海外に於いても起こりうることを知らせる。

そうした間違いを指摘する方法を教える。

これを通じて、納得のゆかないことに対してストップをかけて点検する態度を養う。

手順：教科書に載っている店員と客のやりとりを一通り学習した後の発展的学習として行う。生徒を 4 名のグループに分け、例えば gloves, T-shirt, cap, cards, jacket などの商品カードと模擬貨幣を用いてショッピングゲームを行う。机上に商品カードを並べ、1 名が店員、他 3 名が客となる。客は商品カードの中から欲しいもの数点を選び、店員に差し出し、店員が合計金額を請求して客が模擬貨幣で支払う。ここまでは教科書本文をモデルにした型どおりのショッピングゲームである。

次に、客がそれぞれ 2 回ほど買い物をした時点で、教師は店員役の生徒を廊下に呼び出し、「これから時々わざと合計金額や釣銭を間違えることにする。ただしこのことを誰にも話してはいけない。客から間違いを指摘されたら、“Oh, I'm sorry.” と言って訂正すればよい。」と指示する。こうして再びショッピングゲームを行い、クラス中に間違いを指摘する声上がるのを待って、全体セッションに移る。教師が「いま、店員がお金を間違えました、その時客はどう対応しましたか？ どうやって間違いを指摘したらいいと思いますか？」と発問し、出てくる生徒の答えを板書した後、予め ALT に聞いておいた対応策（教科書改作例 1 の右側）を提示する。その後、先ほどのグループで、客・店員双方ともミスを犯すかもしれないという設定でショッピングゲームを行い、間違い指摘の練習とする。

教科書改作例 1

（右側が改作例、斜体部が改作部分で、そのうち下線部が回避方略を表す部分）

教科書本文ダイアログ	改作後ダイアログ
Shop attendant: May I help you?	Shop attendant: May I help you?
Customer: Yes, please. I'm looking for some gloves.	Customer: Yes, please. I'm looking for some gloves.
S: What color do you want?	S: What color do you want?
C: Black.	C: Black.
S: Black ones are over there.	S: Black ones are over there.
C: Can I try them on?	C: Can I try them on?
S: Sure.	S: Sure.
C: These are a little too big.	C: These are a little too big.
S: How about these?	S: How about these?
C: Fine. I'll take them.	C: Fine. I'll take them.
S: Anything else?	S: Anything else?
C: No, that's all. How much are they?	C: Yes, I'll take these post cards. How much are they?
S: Seventeen ninety-five, please.	S: They are 3.80. Thirty-one seventy-five total, please.
C: Here's 20 dollars.	C: <u>Excuse me, but I'm not quite sure.</u> または <u>Thirty-one seventy-five?</u>
S: Here's your change. 18, 19, 10.	S: What's wrong?
C: Thank you very much.	C: The gloves are 17.95 and the cards are 3.80.
	S: Oh, sorry. Twenty-one, seventy-five, please.

C: Here you are.

S: Here's your change. Thank you.

C: Could I have a receipt, please?

<指導例 2 . 通じないよ～！>

対象：中学低学年

目的： 海外で予想しない場面に遭遇することがあることを理解させる。

英語が通じない場合の対処方法を工夫する。

これによって、言葉が通じない場合でもパニックに陥らずに対処する姿勢を養う。

目的の解説：ほとんどの教科書に海外の空港での immigration(出入国審査)での英語のやりとりが取り上げられている。そこでは現地の officer(出入国審査官)が英語で質問し、日本人旅行者がそれに答えるわけだが、どの教科書の問答も routine に従ってよどみなく進行している。教科書のレッスンの主目的が言語形式の提示であり、「出入国審査」はあくまでもそのための副次的設定であるとするならば、このよどみなさは納得できる。しかし、現実には immigration officer が routine を外れて質問をしてくることも稀ではない。筆者のこれまでの海外引率でも、予想外に厳しく質問された生徒もあった。その時は“ What is the purpose of your visit?” という officer の問いに生徒が“ Sightseeing ”でなく“ Study ”と答えたのが原因であり、筆者が説明して解決したが、もしも英語初級者が単独で旅行していてこのような事態に遭遇したらパニックに陥ってしまうだろう。Routine を覚えさせるのを第一段階の指導とするならば、交渉が routine どおりにゆかない場合にどうするかを考えさせることが第二段階である。こうした場面の切り抜け方には定まった正解があるわけではないので、いきなり教師が答を与えるのではなく、まず問題をなげかけて生徒を「困らせ」、その困惑の中から生徒の創造的対処を導くことになる。

手順：教科書に載っている immigration officer と日本人旅行者のやりとりを一通り学習し終えた後の発展的学習として行う。教室の前の方に模擬の入国カウンターを設け、教師が officer、生徒が旅行者を演じて、最初の数人とは教科書本文の routine どおりの会話を行う。やがて officer 役教師は routine を外れた質問を入れることとする。(例:“ You don't look like the person in the photo. ”/ “ Where are you going to stay in the U.S.?” / “ Are you traveling alone or in a group?”など)このようにして、旅行者役の生徒の反応を見、生徒が立ち往生してしまった時点で会話をストップし、クラス全員に対して「このような場面ではどう対処したらよいか？」と問いかける。生徒たちからの様々な創造的な対処法を聞き出し、それを板書してから、教師が用意しておいた対処法を紹介する。

教科書改作例 2

(右側が改作例、斜体部が改作部分、そのうち下線部が対処方略を表す部分)

教科書本文	教科書改作
Officer: Passport, please.	Officer: Passport, please.
Satomi: Here it is.	Satomi: Here it is.
Officer: O.K. Have a nice stay.	Officer: <i>△ ▽ ?</i>

Satomi: Thank you.	<i>Satomi: <u>I beg your pardon?</u></i>
	<i>Officer: 凸 凹 ?</i>
	<i>Satomi: <u>Could you speak slower, please?</u></i>
	<i>Officer: 凸 凹 ?</i>
	<i>Satomi: <u>I'm sorry, but I don't understand.</u></i>
	<i><u>Please call a Japanese speaker.</u></i>

以上、社会の実態を踏まえた自己防衛的英語指導の例を紹介した。上例のように、危険回避やトラブル対策を盛り込みながら、授業を明るいトーンで行うことは可能である。こんな時どうしたらいいか」という、謎解きに似たチャレンジは、教室に創造的刺激を与えるものである。このような問いかけは、英語だけでなく母語での生活にも役立ち、ともすればマンネリになりがちな授業と教材に、新しい活気を与えるものでもある。

5 この授業を通じて生徒の中に育てたいこと

以上にわたって、「自分を守る」という観点で、今後の英語教育の方向性を論じてきた。普通の日本人が個人レベルで海外に出かけ、さまざまな交渉を行うことが日常的となった現代に於いて、いたずらにきれいごとの世界を見せるのではなく、犯罪被害やトラブルを含めた実態を正しく反映した上での言語教育が求められている。児童・生徒の世界へのあこがれや世界貢献の理想を大切にしつつ、一方ではしたたかに自分を守る賢明さも育てたい。それが 21 世紀にふさわしい日本の英語教育ではないだろうか。

(静岡大学教育学部、etmiura@ipc.shizuoka.ac.jp)

引用文献：

<http://www.safetycops.com/> (2001) "Travel tips for those visiting the U.S. from abroad".